

平成 30 年 6 月 15 日現在

機関番号：32699

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2017

課題番号：25370270

研究課題名(和文) 現代アメリカ演劇研究 新たな研究方法の構築に向けて

研究課題名(英文) A Study of Contemporary American Theatre: Searching for a New Research Methodology

研究代表者

内野 儀 (Uchino, Tadashi)

学習院女子大学・国際文化交流学部・教授

研究者番号：40168711

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、演劇研究の方法が交錯する同時代的文脈において、テキスト(戯曲＝ドラマ)とパフォーマンスの関係をめぐる新たな理論的な知見を参照しつつ、現代アメリカ演劇の諸実践を記述・分析、あるいは歴史化する道筋を見だし、また実際にそうした記述・分析、あるいは歴史化の作業を行うことにある。研究期間中、ベルリン自由大学国際演劇研究センターに滞在する機会を得て、ドイツ語圏を中心とする演劇研究についての知見を得ることができた。また、本研究の成果の一部は、研究期間中に出版された単著『「J」演劇」の場所 トランスナショナルな移動性(モビリティ)へ』(東京大学出版会、2016)に示すことができた。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research project was to find a way, within complex contemporary contexts of research methodologies for theater and performance, to “properly” study and analyze contemporary American theater cultures referring to, and utilizing newly developed theoretical tools, in the hope to start engaging in the actual writing process of academic papers, regarding the issue.

During the project period, I had a chance to stay International Research Center “Interweaving Performance Cultures” at Free University of Berlin and was able to immerse myself within the European theater studies discursive space. At the same time, partly as a result of this research project, I was able to publish a book (“The Location of ‘J’ Theatre: Towards Transnational Mobilities,” U. of Tokyo P., 2016).

研究分野：表象文化論・英文学

キーワード：演劇研究 アメリカ演劇 パフォーマンス研究 グローバリゼーション 現代演劇 身体論

1. 研究開始当初の背景

今世紀に入ってから英語圏の演劇研究においては、1980年代から始まるいわゆるパフォーマンス研究が一定のヘゲモニーを掌握したという認識のもと、パフォーマンス研究という半永久的な脱領域性を標榜する学問分野が辿ってきた歴史の変遷の系譜学的研究を端緒とし、文学研究とより親和性の強かったそれ以前の研究方法の見直しが始まっている。パフォーマンス研究は演劇研究を、文学的価値の高いとされるキャノンカルな戯曲を対象とする研究活動から研究者を解き放ただけでなく、上演芸術としての演劇という視座から、多様な概念装置や理論を生み出しつつ、またたくまにその研究領域を広げ、パフォーマンス研究を標榜する研究者の数も英語圏を中心に莫大な増加を見ることになった。他方、その広がりとは裏腹に、いわゆる劇場演劇についての研究は拡散する傾向を強く示し、戯曲(ドラマ)研究と上演(パフォーマンス)研究のあいだの距離は広がるばかりか、むしろこの二つは別の研究分野であるとさえいえる学界的事態が訪れたのである。そうしたなか、英語圏の若手の研究者からは、パフォーマンス研究からの発信というかたちであれ、テキストとしての戯曲(ドラマ)研究に対するあらたな理論的興味が生まれており、たとえばそれは、Routledge社のCritical Conceptsシリーズにおいて、Martin Puchner 編集による*Modern Drama* (2008)全4巻が出版されたことに象徴的にみてとることができる。それに先立ってPuchnerは、*Stage Fright: Modernism, Anti-Theatricality, and Drama* (Baltimore: Johns Hopkins UP, 2002)や*Poetry of the Revolution: Marx, Manifestos, and the Avant-gardes* (Princeton: Princeton UP, 2005)などの著作において、そうした戯曲(ドラマ)研究が単なる過去の文学研究としての戯曲研究への揺り戻しではなく、パフォーマンス研究の成果を踏まえた演劇研究の理論的革新を目指すものであることをすでに示し、大きな注目を浴びていた。本研究はこうした同時代の学問的文脈を踏まえた上で、戯曲(ドラマ)研究とパフォーマンス研究それぞれのこれまでの歴史の変遷と理論的展開をじゅうぶんに辿りなおし理解した上で、今あらためて、現代アメリカ演劇研究の可能性を探るものである。その際、「現代」や「アメリカ」というのはある意味では便宜的な呼称であることは強調しておく必要がある。というのも、演劇にはさまざまな古典(テキスト)の上演も含まれ、「アメリカ演劇」とは、アメリカ合衆国内で作られる演劇であるとはいえず、そこには多種多様なインターカルチュラルな、またイントラカルチュラルな力線が交錯しているからである。

申請者は従来、アメリカ合衆国という文化圏の内部において、演劇というメディアが社会的重要性を増すことになった1960年

代以降におけるアメリカ現代演劇の研究をさまざまな角度から行ってきた。その成果は申請者の博士論文となった『メロドラマからパフォーマンス 20世紀アメリカ演劇論』(2001年、東京大学出版会)として出版しているが、本書では題名にもあるとおり、20世紀初頭のユージン・オニール等の劇作家の戯曲研究から1980年代にそのピークを迎えるパフォーマンス・アートまで、時代的に言うなら、おおよそ1990年前後までがその研究対象となっていた。その後申請者は、「グローバリゼーション」をキーワードとして、アメリカにとどまらない現代演劇研究を続けてきたが、本研究もまた、申請者の一貫した研究的興味と研究成果の延長線上に位置づけられるものである。

2. 研究の目的

本研究の目的は、演劇研究の方法が交錯する同時代的文脈において、テキスト(戯曲=ドラマ)とパフォーマンスの関係をめぐる新たな理論的な知見を参照しつつ、現代アメリカ演劇の諸実践を記述・分析、あるいは歴史化する道筋を見だし、また実際にそうした記述・分析、あるいは歴史化の作業を行うことにある。

3. 研究の方法

本研究は、研究の第一段階として、英語圏(主に米英)と大陸ヨーロッパ(なかでもフランスとドイツ)について、演劇研究の歴史が、主としてルネッサンス以降、どのように展開してきたかを、比較対照しつつ、大まかに把握する。

(1) 文学研究のサブジャンルとしてのドラマ研究が、英語圏においてニュークリティシズム以降、どのように展開してきたかを精密に調査・研究すると同時に、大陸ヨーロッパ、なかでもフランス・ドイツ語圏における演劇研究が、この期間、どのような様相を見せていたかを比較検討する。

(2) パフォーマンス研究の登場という1980年代の事態につき、すでに歴史化されている系譜学的資料を踏まえたうえで、再度、登場の歴史的場面に立ち戻り、文学研究としてのドラマ研究の同時代の動向と比較参照しつつ、現時点から振り返って、何が言えるのかを思考する。と同時に、そのような研究上のパラダイムシフトが起きなかったと考えられる大陸ヨーロッパにおける演劇研究について、同じ時代にどのような展開が見られたのか、調査・研究を行う。

(3) ドラマ研究の再登場という今世紀に入ってからのものであることについて、単にその結果として書かれた研究書を参照するのではなく、それが書かれた歴史的、社会的、文化的文脈をふまえた上で、同じく英語圏と大陸ヨーロッパ圏における演劇研究をめぐる言説を比較検討する。

(4) こうした調査・分析の作業と同時並行

で、これまでの理論的成果を踏まえた上で、テキスト（ドラマ）とパフォーマンスの関係について、申請者なりの理論化と歴史化の作業を継続して行う。

（５）以上のような作業において見いだされることが想定される新たな演劇研究の方法につき、随時、新たな知見を参照しつつその方法をアップデートすることを心がけながら、実際の作品／上演研究を行う。この場合、一方ではテキスト中心主義的と見なされる古典テキストの新演出作品や現代劇作家による作品上演に注目し、他方ではパフォーマンス中心主義と見なされる演出家、ないしは舞台作家とでもいうべきアーティストによる作品やパフォーマンス・アート、あるいはダンスまでを含めて広く現代アメリカにおける舞台芸術を研究対象としたい。

既に触れたように、演劇研究が文学研究の領野を離れ、たとえば申請者がそのディシプリンに帰属すると自覚しているパフォーマンス研究という新たなディシプリンを立ち上げてからかなりの時間が経過した。パフォーマンス研究は、「パフォーマンス」という概念をキーワードにして、狭義の演劇や芸術の諸実践から社会的現象まで、さまざまな対象を学際的な方法論によって記述分析しようとする学問分野だが、今世紀に入ってここで書いてきたような一種の揺り戻しが見られるとはいえ、それはあくまでパフォーマンス研究の展開上における揺り戻しである。ところが、日本における演劇研究は、外国演劇については各国文学研究の下位に位置づけられたままで、パフォーマンス研究どころか、アメリカの現代演劇研究も、あるいは日本の現代演劇研究も、ほとんど行われていないのが実情である。行われていないというのが言いすぎであるなら、主として単なる伝統的な意味での戯曲研究にすぎないものや紹介程度の研究しか行われていないと言ってもよい。近年、申請者自身の業績を含め、少なくともジャーナリスティックなパフォーマンス研究的文献は書かれてきてはいるものの、当事者的でありすぎたり、あまりに近い時代であるということも手伝って、我が国においては、学術的に意味があるパフォーマンス研究はようやく端緒についたところというのが実情であろう。こうした日本の研究状況からいっても、従来の戯曲研究を踏まえた上で、パフォーマンス研究的視座から演劇におけるテキストとパフォーマンスの関係の同時代的再定義を試みる本研究は、画期的なスコープをほこる野心的かつ重要な研究であると申請者は自負している。

４．研究成果

本研究の目的は、演劇研究の方法が交錯する同時代的文脈において、テキスト（戯曲＝ドラマ）とパフォーマンスの関係をめぐる新たな理論的な知見を参照しつつ、現代アメリカ演劇の諸実践を記述・分析、あるいは歴史化

する道筋を見だし、また実際にそうした記述・分析、あるいは歴史化の作業を行うことにある。研究期間中、ベルリン自由大学国際演劇研究センターに滞在する機会を得て、ドイツ語圏を中心とする演劇研究についての知見を得ることができた。また、本研究の成果の一部は、研究期間中に出版された単著『「J」演劇」の場所 トランスナショナルな移動性(モビリティ)へ』（東京大学出版会、2016）に示すことができた。各年度における研究成果を以下に記す。

【平成25年度】

演劇研究の歴史という側面と今世紀に入ってからテキストとパフォーマンスの関係の再理論化という事態について、該当する主題にかかわる基本図書、すなわち広義の演劇史にとどまらない現代アメリカ演劇関係や演劇理論関係の研究書や演劇を扱ったさまざまな雑資料（新聞、大衆雑誌を含めた諸雑誌）の収集を開始した。と同時に、本研究の主題が歴史把握や思考のフレームといった同時代的問題に触れるため、ポスト構造主義以降の批評理論や思想一般にかかわる欧米並びに日本の資料を収集した。また当該年度は、資料収集と研究内容のレビューのため、短期間渡米する計画を立てていたが、校務のため、断念せざるを得なかった。また、本研究の指導的立場にあるワシントン大学のハーバート・ブラウ教授が急逝したため、主としてニューヨーク大学のリチャード・シェクナー教授と電子メール等で研究の進捗状況について、やり取りをおこなった。ヨーロッパの舞台芸術フェスティバルへの訪問は、他資金を用いて、国際演劇協会（ITI）主催の音楽劇賞受賞式及びシンポジウムに参加するのみとなった（スウェーデン舞台芸術マーケットと同時開催）。一方、追加的にシンガポール南洋工科大学のワン・リン准教授との将来の研究協力関係の打ち合わせのため、シンガポール出張を行った。また、京都造形芸術大学附属舞台芸術研究センターに出張して、センターの関係者と研究についての打ち合わせを実施した。

【平成26年度】

演劇研究の歴史という側面と今世紀に入ってからテキストとパフォーマンスの関係の再理論化という事態について、昨年度に引き続き、該当する主題にかかわる基本図書、すなわち広義の演劇史にとどまらない現代アメリカ演劇関係や演劇理論関係の研究書や演劇を扱ったさまざまな雑資料（新聞、大衆雑誌を含めた諸雑誌）の収集を行った。と同時に、本研究の主題が歴史把握や思考のフレームといった同時代的問題に触れるため、ポスト構造主義以降の批評理論や思想一般にかかわる欧米並びに日本の資料の収集を継続した。当該年度は、資料収集と研究内容のレビューのため、短期間渡米し（費用は別資金）本研究の指導的立場にあるニューヨーク大学のリチャード・シェクナー教授と面

談し、研究の進捗状況について、ご指導をいただいた。一方、昨年同様、シンガポール南洋工科大学のワン・リン教授との研究協力関係の打ち合わせのため、シンガポール出張を行った（費用は別資金）。また、京都造形芸術大学附属舞台芸術研究センターに出張して、センターの関係者と研究についての打ち合わせを実施した。

【平成27年度】

演劇研究の歴史という側面と今世紀に入ってからテキストとパフォーマンスの関係の再理論化という事態について、昨年度に引き続き、該当する主題にかかわる基本図書、すなわち広義の演劇史にとどまらない現代アメリカ演劇関係や演劇理論関係の研究書や演劇を扱ったさまざまな雑資料（新聞、大衆雑誌を含めた諸雑誌）の収集を行った。と同時に、本研究の主題が歴史把握や思考のフレームといった同時代的問題に触れるため、ポスト構造主義以降の批評理論や思想一般にかかわる欧米並びに日本の資料の収集を継続した。当該年度後半、サバティカルを得て、ベルリン自由大学国際演劇研究所に半年間滞在し、資料収集と研究活動に従事した。そのなかには、研究所所属研究者との研究交流のほか、研究所内セミナーでの発表に加え、ミュンヘン等への研究のための調査旅行も含まれる。一方、ベルリンでの研究の延長線上で、現地調査のため、シンガポール国際演劇祭に参加し、アーカイブ・ボックス・プロジェクトについて、参与観察を行った。この間の研究成果をまとめて、文芸誌である「新潮」に学術論文として発表した。

【平成28年度】

前年度から引き続き、演劇研究の歴史という側面と今世紀に入ってからテキストとパフォーマンスの関係の再理論化という事態について、該当する主題にかかわる基本図書、すなわち広義の演劇史にとどまらない現代アメリカ演劇関係や演劇理論関係の研究書や演劇を扱ったさまざまな雑資料（新聞、大衆雑誌を含めた諸雑誌）の収集を行った。と同時に、本研究の主題が歴史把握や思考のフレームといった同時代的問題に触れるため、ポスト構造主義以降の批評理論や思想一般にかかわる欧米並びに日本の資料の収集を継続した。諸般の事情から、海外での資料収集は積極的に行うことが本年度ではできなかった。その一方で、昨年度の海外における資料収集の成果を受け、本研究補助金による研究成果を含む『「J演劇」の場所 トランスナショナルは移動性（モビリティ）へ』を東京大学出版会から出版できたことが、今年度の大きな収穫であった。本書は、これまで研究代表者が発表してきた論文を中心に、本研究で明らかになった知見を含め、日米の現代演劇について、詳細に論じた論文集であり、学会誌等の書評でも高い評価を得ている。

【平成29年度】

資料収集を継続しつつ、これまでの研究のま

とめを中心に行った。ただし、研究代表者の勤務先が変わったため、アウトプットという点ではこれまでよりは量的にはまんぞくできるものではなかったが、これ以降、本研究の成果を、継続的に発信していきたい。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計9件)

1. 内野儀、観光客の演劇 神里雄大の時代、新潮、査読無、115巻3号、2018、217-223
2. 内野儀、舞台芸術の地殻変動 移動性（モビリティ）と滞在（レジデンシー）の現場から、新潮、査読無、113巻2号、2016、160-173
3. 内野儀、方法論としてのニュー・ドラマ ツールギー 共同討議の余白に、表象、査読無、10、2016、181-189
4. 内野儀、飴屋法水のこと 『いりくちでくち』に参加して、新潮、査読無、112巻2号、2015、252-253
5. UCHINO, Tadashi, What about Machines? Performing “J-type” Technology in Japan’s Performance Culture, Dance Research Journal of Korea、査読無、71.3.、2013、189-215
6. 内野儀、媒介（メディアム）としての日本 舞台芸術のモビリティを高めるために、viewpoint、査読無、63、2013、8-10
7. 内野儀、演劇、文藝年鑑、査読無、2013年版、113-115
8. 内野儀、現代英米演劇の研究、『英語年鑑』、査読無、2013年版、2013、30-34
9. UCHINO, Tadashi、Cody Poulton's "A Beggar's Art: Scripting Modernity in Japanese Drama, 1900-1930", Journal of Japanese Studies、査読無、39.2.、2013、414-417

〔学会発表〕(計8件)

1. UCHINO, Tadashi、Theatre of the Tourist in the Age of Mobility: Kamisato Yudai and Choy Ka Fai, Donald Keene Center for Japanese Culture, Columbia University、2018
2. UCHINO, Tadashi、An Introduction to “The Theater and the Theatrical: Reconsidering American ‘Drama’ in the Age of Trump”、アメリカ学会第51回年次大会、2017
3. UCHINO, Tadashi、Simultaneous Turns in Globality: Performative and Social Turns in the New Millennium, or Theorizing/Historicizing Okada Toshiki’s Welcome to European Festival Cultures (revised)、Art and Society in Contemporary Japan: The

- Theatre of Okada Toshiki、トリアー大学(ドイツ)、2016
4. UCHINO, Tadashi、After the Quake: Some Reflections on Immediate Performative Responses after 3.11.、ベルリン自由大学国際演劇研究センター <Interweaving Performance Cultures>、2016
 5. UCHINO, Tadashi、Simultaneous Turns in Globality: Performative and Social Turns in the New Millennium, or Theorizing/Historicizing Okada Toshiki 's Welcome to European Festival Cultures、日本英文学会全国大会(立正大学)、2015
 6. 内野儀、役者評判記からプログまで 日本の劇評、劇評の日本、北京戯曲評論学会、2014
 7. UCHINO, Tadashi、Imagining New "Asian" (Post)Human Sciences: The Resistible Fall of Humanities in Japan and Elsewhere?、International Symposium, Celebrating the 10th Anniversary of the School, "Humanities and the Social Sciences and Asia"、シンガポール南洋工科大学、2014
 8. UCHINO, Tadashi、"Database Animals" and the Avant-garde: Materializing Transnational, Transient Subjectivities in Posthumanity、Center for East Asian Studies, The University of Chicago、2014

〔図書〕(計1件)

1. 内野儀、東京大学出版会、「J演劇」の場所 トランスナショナルな移動性(モビリティ)へ、2016、440頁

6. 研究組織

(1)研究代表者

内野 儀 (UCHINO, Tadashi)

学習院女子大学・国際文化交流学部・教授

研究者番号：4 0 1 6 8 7 1 1